

第6回県立高等学校の在り方検討委員会の概要

日時：令和6年6月18日（火） 13:30 ～ 16:00

場所：高知県人権啓発センター 6階 ホール

第1 会次第

1 開会

- (1) 教育長挨拶

2 講演

「地域との協働による魅力ある高校づくり」

講師：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム 代表理事 岩本 悠 氏

3 議事

- ・学校の魅力化・特色化について
- ・入試制度の在り方について

4 閉会

- (1) 教育次長挨拶
- (2) 諸連絡

第2 議事における質疑応答

1 学校の魅力化・特色化について

(委員長)

県内、県外の魅力化・特色化の事例をご紹介いただきました。まず、中山間地域の魅力化・特色化が非常に急務であり、嶺北高校が高知県の中では先進的に生徒数の推移をみてもうまく回り始めています。副委員長の方から嶺北地域の取組についてご紹介いただきたいと思います。

(副委員長)

嶺北高等学校は嶺北地域唯一の高等学校であり、魅力化することにより高校の存続、嶺北地域全体の活性化につなげることを目的に取組を進め、組織化しました。資料8に嶺北高等学校魅力化の組織図がありますが、平成30年3月に嶺北高等学校魅力化の会が発足しました。会のメンバーとしましては、4町村の首長と嶺北高等学校の学校長の5名になっています。この会を最上部組織とし、平成30年4月にはその実行部隊として、嶺北高等学校魅力化推進協議会を立ち上げています。この会は、子どもたちが「行

きたい」、保護者が「行かせたい」、地域が「活かしたい」と思う地域や学校づくりを推進していく取組体制を確立しました。

また、令和2年3月、一般社団法人れいほく未来創造協議会を立ち上げ、これまでの魅力化の取組の推進体制をより明確にし、さらに充実させることを目的にしています。話が後先になりますが、平成29年5月に留学についての準備会も設立しまして、県外生徒の受入れ準備を行っています。本日、お越しいただいております岩本様とともに、隠岐島前高校で高等学校魅力化の推進に携わっておられた大辻雄介氏を嶺北地域にお招きし、嶺北高校のコーディネーターの立場でご尽力をいただき、今日に至っています。

また、令和3年には、れいほく教育魅力化・交流支援センター、通称「とまり木」が、寮の機能と公設塾に加え、地域内外の交流機能を備えた複合施設として、県の補助金をいただきながら完了しました。それまで寮は本山町と土佐町の民間施設や、土佐町が管理する住宅を一部使い、公設塾は嶺北高等学校の一室を使って運営していました。

地域協働コンソーシアム推進委員会は立ち上がっていましたが、令和2年から本格的に動き出し、コンソーシアムの窓口は、れいほく未来創造協議会に持っていただき、探究学習を支援する整備体制や、多様で深まりのある活動の実現、学校と地域が協働した取組を行うことで、将来の地域創造の担い手を育成することを目的に推進委員会を立ち上げました。構成としては4町村の役場、行政、教育委員会、観光協会や社会福祉協議会、森林組合、J Aあるいは集落活動センターなどの多様な方々を推進委員とし、嶺北探究についての進め方を協議しています。

また、地域みらい留学では、嶺北地域の行政施策の一つとしてカヌー競技を進めており、平成30年の第1回目の地域みらい留学では、カヌーでの留学を目指す生徒を前面に押し出し募集をかけました。また、寮や公設塾は、先ほど申しました令和3年完成の新しい施設で、地域おこし協力隊や一般社団法人で雇用した職員が運営にあたっています。

次に、自治体からの支援体制を紹介します。まず、海外研修助成制度です。これは、土佐町と本山町でそれぞれ制度をかまえています。嶺北高等学校に在学する生徒に対し、海外の生活文化や交流等を通じた学力やコミュニケーション能力の向上、世界に目を向けた将来展望を持つことを目的として、費用の90%、上限は50万円ですが、支援制度をかまえています。行き先は原則として英語圏です。

また、奨学金の返済申請免除制度も両町でやっており、土佐町中学校、嶺北高等学校を卒業した者、本山町は嶺北中学校、嶺北高等学校だと思いますが、町内で嶺北高等学校の関連する行事において、大学年次ごとに目安として年間40時間以上の地域貢献事業活動を実施すると、その年度分の奨学金返済が免除になる制度をかまえています。この制度は、地域貢献活動を強制するものではなく、大学に出た場合に地域から離れてしまいますので、子どもと地域のつながりが切れない仕組み、そして、それがUターンにつながる、関係人口の拡大になることを目的にしています。

終わりにになりますが、自治体負担です。最後に申しました支援制度を除いて魅力化に係る事業ですが、土佐町の令和6年度当初予算ベースでは、約2200万円がかかります。そのうち、デジタル田園都市国家構想交付金が約1000万円活用でき、そういった経費を活用して、魅力化に係る運営に充てています。最も大きい経費は、法人運営に係る、例えば、寮のハウスマスターや塾の講師、事務局の事務局長、地域のコーディネーターの人件費で、施設の運営費だけでも、年間事業費で3400万円ほどかかっています。

(委員長)

オブザーバーの岩本様からアドバイスなどあればお願いします。

(オブザーバー)

全国的にみても素晴らしいモデルだと思います。特に、奨学金の仕組みは先駆的な動きだと感じます。地元自治体は、卒業した子との関わりに対して思いを持たれることが多いです。卒業生が地域を出ても地域に関わりたい、貢献したいという思いを持っているとしても、つながりが切れてしまうということをよく聞きます。地元自治体側も問題意識を持って、卒業後もつながり続けて高校にも関わってもらい、地域に関わってもらい仕組みをどうしていくかが、大きなテーマになってきています。そこにおいても、れいほく未来創造協議会などの取組は参考になると思いました。

(委員長)

今のお話だと年間数千万円のコストがかかります。今日の話でいかにコストをかけずに維持するかというお話もありました。嶺北のこの例には、これぐらいのコストはかけないといけないイメージでしょうか。コストを減らすアイデアなどがあればお願いします。

(オブザーバー)

例えば、公営塾でオンラインなどを活用しながら、最低限の人で効果的に生徒の学びを担保していくことは一つあるかもしれません。寮費等も魅力があつて、そこに行きたいご家庭がたくさんあれば、それなりの負担をしていただくことも場合によっては検討する。そういったことも含め、さらなる効果的な経営はあるかもしれないと思います。

(委員長)

嶺北の場合は、カヌーでアピールができています。部活動は地方の小規模校でどうやっていけばよいか、他にも事例があればお願いします。

(オブザーバー)

喜界島にある喜界高校では、珊瑚を地域の売りにして、「サンゴ留学」と銘打って留学生は珊瑚の研究をやっていく。部活や地域の特色を柱にして、そこに興味関心がある子たちに来てもらう。興味関心がある子は、将来的にそれに関わることも考えられる中で特色を打ち出している学校があります。

(委員長)

清水高校は普通科の学科改編を進めていくとのご紹介がありました。土佐清水市のコーディネーターとして、清水高校の支援をしている委員の方から清水高校と土佐清水市の連携についてお話をいただければと思います。

(委員)

清水高校が未来共創科になる中で、まだ仮称ですが、清水学際という授業を設けることにしています。高知県全体の過疎化が進む中でSDGsの中の4項目を取上げ、一つは海を守る。土佐清水は海を基本としており、昔から漁業が盛んです。テーマを絞り高校の中で地域を知り、自分たちはどう貢献していくのかを考える授業を設けることにしています。それから、ジョン万次郎の出身地ですので、小中高連携して英語教育にはかなり力を入れています。高校では、姉妹都市であるアメリカに短期留学をしています、学校との連携がなくなっているので、計画を立てて話を進めていこうとしています。

魅力化については、土佐清水の地域イベントなどにも参加してもらい、仮称ですが地域応援団、チームをつくって話を進めています。卒業生などの任意の人たちでチームをつくっています。

最後になりますが、自治体との連携が必要だと感じています。スタートするに当たっては財源的なものも必要だと思っています。私は市の職員だったので、県立高校は清水の自治体にとっては離れた感じがあります。それは、今の立場になって余計に感じます。未来共創科を立ち上げる際の協議は、市の教育長や高等学校振興課の方たちと連携しておりますので、施策や財源のことも含めて人の連携が大事と思っています。退職しましたが、市の状況も分かっているからこそ、連携役としてやっていきたいと思っています。

(委員長)

岩本様からは、協議から協働に向かってというお話がありましたが、コーディネーターの立場として協議を超えて、市役所や地域の人と学校と一緒に作業することが出てきています。コーディネートの役割ですが、他の人を巻き込んで動かすところで必要なものはあるのでしょうか。

(委員)

私が市の職員だったことで地域の方などに関係があるため、うまくいっていると思い

ますが、実際に進めたときにこれでよいのかという不安は正直あります。今、先生たちがまだ勉強をしている段階であることが正直なところでもあります。

(委員長)

岩本様からアドバイスがあればいただきたいです。

(オブザーバー)

今後のポイントになると思ったところの一つ目は、新しい普通科をつくるときに、探究的な学びや、地域や大学との連携が肝になるかと思います。そこを中途半端ではなく、しっかりやる。教員だけでやると大変ですので、地元自治体や関係者と一緒につくっていく。生徒が地域に出て一緒に活動することになって初めて、高校生のためにやっていこうとなってきます。地域との協働を進めるうえで、地域の方や行政にお願いし、学校だけで何とかしようとしなないことがポイントだと思います。

二つ目は、地域協働をするときに、県外生徒は興味を持ちますが、地元の子は小学校や中学校のときにふるさと教育を受けてきて、地域のことに興味を持たないことがよくあります。そのときに、地域のためでなく、地域をフィールドにしながら学びをしていくと、力が付いて進路実現につながる。そこまでないと、地元の子や保護者は、国公立大学も含めて行けるかということに関心があるので、探究をして力を付け、国公立大学では総合型選抜も含めて入っていける進路のところまでつなげる。教員は、教科の学びを結び付け、教科の力を生かすことで、探究したことがはね返ってくる。ただ活動をして学びなし、進路なしだと生徒は来ないので、そこまでやるのが二つ目のポイントになると思います。

(委員長)

ここまで中山間、過疎地域の課題について主に議論してきました。普通科では、高知市内の拠点校、安芸、中村の拠点校についても考えていく必要がある気はします。普通科について皆さんからご意見はありませんでしょうか。

(委員)

先ほどの議論の中でもありました地域連携は大切だと思っています。中山間は生徒数が少なく、学食に入る業者が経営できず撤退していくというお話も聞きます。学校だけの枠組みで学食や寮の防犯などをまかなうことは大変なことだと思います。学校だけの枠組みを取り払い、地域で、特に中山間地域は一人で住んでいる方はたくさんいますので、市町村単位になろうかと思いますが、学校だけでなく枠組みを越えた考えも必要になってくると思います。

また、奨学金の話もありましたが、奨学金を借りている人が多くおり、ハンデを負っ

て社会生活をスタートしています。高知県や市町村に残った場合、自治体が奨学金の一部を返済できるという仕組みをつくると、より一層高知県に人が残るのではないかと思います。

(委員)

講演をお聞きし、協働体制が大事であること、そして、嶺北、清水などの地域の取組、子どもたちが少ない中で一生懸命取り組んでいることがひしひしと伝わってきました。高知県の中心地である追手前高校等の普通科は進学校ですが、残念ながら入学者が少ない状態です。普通科は土佐清水で変わっていくことも踏まえて、追手前高校等の学校をどうしていくのか心配されるところです。

(委員長)

高知市内の追手前、小津、それから、国際に変わり明確に特色が出てきていると思います。魅力化を進めていくうえでは、どういう特色のある学校なのかを学校ごとに明確にする必要があるのかもしれない。

(委員)

ある保護者の方からは、追手前高校は何を望んでいるのか、東京大学に進学させることを望んでいるのか。行っている子どもたちの宿題が多く、大変で面白くないという話を聞きました。だから、特色は大事だという話をしてきたところです。

(委員)

高校教育が現在の形になっているのは歴史的経緯があり、高校教育であるがゆえに様々な制約条件のもとでつくられています。そうしたときに、嶺北高校のコンソーシアムをみると、高校教育改革のために市町村が頑張っているのか、地域の産業振興の中に教育も入って頑張っている話なのかで入り方は違う気がします。本会では、入り方を慎重に議論しておく必要があり、どこまで踏み込めばよいのか気になりました。

資料7では、令和5年に目指すべき姿としていくつかの指標がありますが、費用対効果がどのぐらいか教えていただければと思ったところです。地域との連携が必要であることはそのとおりだと思い、自治体行政のかませ方をどう考えて本会では受け止めるのか、検討がいると思ったところです。

(委員長)

れいほく未来創造協議会は嶺北高校のことだけをするのですか。それとも、もう少し広くいろいろなことをする組織でしょうか。

(副委員長)

そもそも嶺北高校の振興については、嶺北高等学校振興会があって、体育部会があり、かつては農業高校もありましたので、OBの方々が引き続いて嶺北高等学校を振興していくということでありました。それが、魅力化推進協議会になり、協議会では行政の部分があるので、これを一般社団法人として立ち上げ、それぞれの自治体から支援し、嶺北高等学校魅力化についての活動をする協議会となりました。ただ、広い意味で言いますと、地域の活性化や産業振興の部分も、将来的に担うことの目的はあるとご理解いただけたらと思います。

(委員長)

次に、産業系専門学科の魅力化・特色化でご意見あればお願いします。

(委員)

安芸高校は、去年から専門学科と普通科が統合しました。併設型の中高一貫教育校であり、中学校との連携、専門学科との連携の要素が入っている学校です。DXハイスクールも今年からやることになっています。その中で、今年から一緒に校舎で活動することになって人数も増え、活発にできる環境ができた印象があります。特に機械土木科は、デジタルのような高度化されたものを用いて地元企業と授業をするのは、大きな魅力だと思っています。デジタル化については、中学校で技術の授業があり、そこに高校の免許を持っている教員が授業に行く中で、具体的なデジタルに関する取組を最終目標として進めることができていることが、専門学科と一緒になったメリットだと思います。専門学科の特色を出すうえでは、学校だけでなく、地元企業を活用しながら進めていくことができればうれしいと思います。

(委員長)

安芸は地元の土木業者さんたちが、高校にとっても期待をされているのを感じます。工業に限らず地元の地場産業、企業との連携は重要な感じがします。農業も最近は法人化し、大規模にハイテクを使っている事業者も多いので、農業高校と連携して最新の産業がどうなっているかを見る機会、あるいはどのような人材が欲しいかを聞く機会が必要です。

(委員)

地元企業で仕事をしている方々と連携し、地域の課題を見せていくことは、モチベーションを高める点ではインパクトがあるとお聞きしました。それプラス高校生に対してもそうだと思いますし、中学校との連携となったときに、下の学年と連続性を持たせて、学びをシームレスにしていくかを追い求めていくと魅力になると思います。

それから、高校と県立中学校が併設になっている場合はやりやすい。地元の市町村の中学校がある場合に、連携していろいろな学びを提供し、豊かなものにしていけばよいとは思いますが、それぞれの立ち位置が違うと難しいところもあります。

また、外国にルーツのある子どもたちへの対応については、最初のご講演の中であったように、外国からの留学生も、日本の教育を受けて、マインドとしては日本人と同じ感覚で物事の対応ができる人材を増やすことが、地域にとってはアセットになると思います。魅力化は誰に対しての魅力なのかということで異なる定義ができると思います。そこをどうとらえていくかは大事だと思います。

(委員長)

市町村が積極的に関わっていくとすると、安芸は、中高併設だけれども安芸市立もあるし、高知市内の場合は私立との関係もあります。中学校側からコメントいただけますか。

(委員)

先日、高校説明会を実施しました。職業系にも結構な子どもが参加していて、どうしてその高校を選ぶのか、どのような魅力があるのかを聞いてみました。そうすると、最先端の内容を学ぶことができることが魅力だと言っていました。高校の設備はどうかということも子どもたちから出てきています。また、高校の先生方に最先端の学びをきちんと教えていただけるのかということも出ていました。

(委員長)

中学生の期待は実は相当高いですね。

次に、総合学科に関しては、これまでの議論で、系列が複雑すぎるので見直した方がよいという意見がありました。普通科に特色を持ち込めるようになったので、総合学科と区別が分かりにくくなる場所もあります。総合学科について皆さんからご意見ないでしょうか。系列の特色が見えにくいので、分かりやすい示し方をするとところが課題だと感じています。

定時制、通信制に関しては、随分皆さんにご議論いただいています。定時制は、多様な学びが実現できる学校で、以前には、不登校を経験した生徒や日本語が得意でない外国の生徒などに対応できる午前、午後、夜間の時間帯での3部制の提案を事務局からも聞いています。私立の通信制が成功し、人気を集めて実際に動き出している、ただ、文部科学省的には中身がどうなのか指摘も受けている。公立が通信制をうまくやれば、私立が抱えている課題を解決しつつ、今までにない通信制ができるのではないかという気がします。定時制、通信制をどう魅力化・特色化するか皆さんのご意見をお願いしたいです。

(委員)

先日、保護者の方から、私の子どもは全日制に入学しましたが不登校で学校に行けないとご相談を受けました。定時制や通信制は多様化していますので、全日制にこだわらず、お子さんに応じた勉強の仕方をしてよいかとお話をしました。その中で、やはり定時制、通信制という名前は、保護者にとって、全日制とは違うという昔からのイメージが変わっていない。インターネットハイスクールやデジタルハイスクールなどの名前の方が、違和感のようなものがないかもしれません。

また、これとは違うかもしれませんが、分校の名前も変えた方がよいと思います。今の時代にそぐわないので、もう少し明るいイメージで、今どきの名前に変えていけばよいのではないかと思います。

(委員長)

定時制、通信制は制度としてはあるけれども、呼び方は変える必要があるかもしれません。通信制は郵便の通信ではなく、デジタル I C T を使ったオンラインの通信制にするのであれば、新しい先進的な学校の在り方も感じられる名前にするのは、重要な魅力化という感じがします。

(委員)

定時制、通信制の名前を変える部分は大賛成ですが、教育課程の在り方そのものが特色あることです。子どもたちが社会の中で自己実現できる学びを多様な形で提供しないといけないうきに、定時制、通信制も多様な学び方の一つの位置付けとしてとらえ直すという意味でも賛成です。

(委員長)

定時制がなくなってもよい気がしていて、通信制がオンラインで配信されるとすると、通信制を受ける場所を提供し、従来の通信制をオンライン化して一本化できる感じもあります。かなりドラスティックな改革になると思いますが、それをする時期にきていると思います。定時制をどうしても残さないといけないう理由もなくなっている感じです。

(委員)

質問ですが、通信制は法律上決められているカテゴリーとしてあるので、そういうレベルのネーミングではなく、違うレベルでのネーミングということでしょうか。

(委員長)

従来の制度に乗っ取ったうえで新しい形をやっていく気がします。事務局からご意見

はありますか。

(事務局)

定時制、通信制については制度の問題です。通信制の呼び方をどうするかは先ほどのご協議の中身で、通信制は今の郵便に合うやり方ではなくて、ＩＣＴ、オンラインなどを活用したデジタル化に対応するもの、先ほど委員長がおっしゃったサテライトを活用して、学びの場所を特定しなくてもよいということであったと思っております。

２ 入試制度の在り方について

(委員長)

今日は十分に議論をする時間はとれませんが、第４回の資料を中心にご説明いただきました。今回の議論の方向性としては、資料３－２にある学校の魅力化・特色化を踏まえた入試制度の導入、県外生徒の受入れの拡充、入試の実施時期の見直しがポイントだと思います。中学校の立場や高校の立場、それから保護者の立場もあり、視点が変わってくる。それで、最後に大事なのは、中学生にとってよい入試が何かはそれぞれお考えが変わってくるところかもしれません。中学校の立場から伺ってもよいでしょうか。現場の多忙感よりは、生徒にとってよい入試にするために、この資料にもまとめはありますが、思われていることがあればお願いしたいです。

(委員)

中学生の姿をみると、今自分は何ができるのか、どういうことを望んで学校に行っているのかが、正確に相手に伝わるのが大事だと思っています。本当に子どもたちにとってよりよい方法って何だろうと考えたときに、子どもの意見を聞かないと何とも言えないと思っていますところす。

(委員長)

子どもたちからするとあまり負担にならない方がよいと思いますが、緩くすると中学校で勉強してくれなくなります。高校の方からございますか。

(委員)

それぞれの学校で何を学びたいかが明確になって学校選びができる、入試をすることが一番だと思います。それと、現在の学力観が変わってきている中で、魅力化・特色化を踏まえた選抜については、何らかの形で入試制度の中に入れていかなければならないと思いました。

(委員長)

P T Aの立場から入試に関して思うことがあればお願いします。

(委員)

特にはございませんが、シンプルにいった方がよいと思います。皆さん立場的に意見があると思いますが、複雑になり過ぎると保護者としても分かりづらいです。

(委員)

入試については、基本的に必要な知識、一定の基準に達しているかどうかを見る必要があると思っています。そのうえで、魅力化・特色化にあわせた入試になるとは思いますが、基本のところを評価できる入試が必要であると思っています。

(委員長)

前半の学校の魅力化・特色化については多くの示唆をいただいて、特に岩本様からご講演をいただき勉強になりました。入試制度については、まだ言い足りないことがたくさんあると思いますので、事務局にフィードバックしていただき、今後整理して検討したいと思います。